

レクチャー&ライブ

チェロは美しい！歌と室内楽のひととき ～室内楽の父：ボッケリーニ～

at 愛知サマーセミナー 2014

<http://www.samasemi.net/>

日時：2014年7月19日(土) 9:30-10:50

場所：名古屋経済大学高蔵中学校・高等学校(桜山駅徒歩10分)

特別教室棟2F音楽室B

参加費：無料 (定員50名)

講座番号：A137



講師：鷺津 仁志

ソプラノ：村井 都

ピアノ：白木伸征

弦楽四重奏：アンサンブルAMK (アクタス・ムジカ・カメラータ)

(Vn. 青井一郎, 太田孝夫, Va. 井口紘子, Vc. 鷺津仁志)

ルイジ・ボッケリーニ(1743-1805)は、ハイドンとモーツァルトの中間の世代の古典派全盛期の作曲家ですが、「メヌエット」「チェロ協奏曲変ロ長調」など今も有名な曲はわずかです。しかし、在世中はヨーロッパ有数の著名人でした。彼が活躍したのはフランス革命前後であり、貴族の力が衰え、ブルジョワジーという小金持ちの市民階層が勃興する時代でした。彼らアマチュア音楽家は、宮廷よりも小規模なサロンや家庭内で、ヴァイオリンやチェロなどの楽器を持ち寄り数人で合奏する「室内楽」に興じました。弦楽四重奏やピアノ五重奏といった室内楽作品は、出版によって流通しましたが、そのベストセラー作曲家のトップ2人が、ボッケリーニとハイドンだったのです。

本レクチャー&ライブでは、室内楽の誕生について、演奏とトークでご紹介いたします。

どなたでもご参加できます。
学校入り口でサマーセミナー
全体への参加登録の後、
音楽室Bにお越しください。
当日は混雑しますので、
地下鉄でのご来場をお勧めします。



お問い合わせ：h@washizu.org (鷺津)

現代に至るまで室内楽の代表的な編成となっている弦楽四重奏（ヴァイオリン 2 挺、ヴィオラ、チェロ）は、1761 年のボッケリーニの作品 2（全 6 曲）において、ほぼ完成された形で提示されました。四つの楽器が精密な対位法によって対等に扱われること、チェロやヴィオラも主旋律を弾くこと、半音階の多用や“ため息”のような繊細な旋律、短調の激しい疾風怒濤、フーガ形式の利用、これらは、クラシック音楽の蘊蓄本では、ハイドンやモーツァルトの作品の発展過程において少しずつ獲得されていった、と説明されているものですが、このボッケリーニの初期作品において全て表現されています。彼がこのような先端的な作品を作り得たのは、ベースラインを担当するチェリストであったため、ヴァイオリニストのハイドンよりも音楽を俯瞰できていたためと考えます。当日は、ボッケリーニとハイドンの“第一番”を、それぞれ生演奏で聞き比べていただきます。

ヴァイオリンとピアノのための二重奏ソナタについても同様で、古い本では、最初はピアノのソナタにヴァイオリンが補助的に伴奏するだけだったのが、徐々に二つの楽器が対等になった、といった書き方がされています。ボッケリーニが 1768 年にパリで行ったリサイタルのために書かれたヴァイオリンソナタは、既にピアノとヴァイオリンが完全に対等に渡り合っており、室内楽として完成されています。当日は、ボッケリーニのヴァイオリンソナタ第6番を演奏します。

また、ボッケリーニはソナタ形式における循環形式の発明者でもあります。循環形式は、多楽章からなるソナタの中に同じメロディを配置することにより、曲の統一性を示すもので、ベートーヴェンの運命交響曲あたりが嚆矢とされ、メンデルスゾーンを経て 19 世紀後半のフランクで究極の様式美を示しますが、ボッケリーニは、チェロソナタや交響曲といった様々なジャンルで実践しています。当日は、ボッケリーニのチェロソナタの演奏と交響曲ハ短調をご紹介します。

チェリスト、アンナー・ビルスマはボッケリーニのことを「最初の印象派」と述べています。この側面は、現代音楽にしか聞こえない、通常の和声進行やリズムを無視した弦楽五重奏ハ長調や、変奏曲形式の中に軍隊が行進してきて去っていく姿を描写した「マドリードの夜警」（後のボロディン「中央アジアの高原にて」やラヴェル「ボレロ」と類似の形式）に、典型的に現れています。当日は、ボッケリーニの「マドリードの夜警」を弦楽五重奏およびピアノ五重奏で演奏します。

ボッケリーニは、コントラバス奏者の息子としてイタリアのルッカに生まれ、ウィーンやパリで活躍した後、スペインのマドリードにおいて皇子の宮廷に仕えました。スペインは、ハイドンが活動した現在のハンガリーと同様、音楽の中心地からは遠かったのですが、上述のとおり出版によって全欧に認められる存在でした。また、スペイン在住であることを活かし、ギターつきの室内楽や交響曲を作曲し、ファンダンゴというスペイン独自の舞踏音楽を作曲したり、弦楽四重奏などの中でも、スペイン風のメロディを展開して、「最初の国民楽派」と呼ばれることもあります。

そして、何よりもボッケリーニを特徴づけるのは、ときに典雅であり、ときに物憂げな美しい旋律です。ソプラノと弦楽のための「スターバト・マーテル」は、数ある同名の曲の中でも最も美しい旋律といわれています。当日は、美しいソプラノと弦楽の演奏をご紹介します。

これほどまで活躍したボッケリーニの音楽が、19 世紀ロマン派の音楽にどのような影響を残したのか、シューベルトやシュポア、メンデルスゾーンを例に紹介し、20 世紀において忘れられてしまった理由について考察します。ボッケリーニについての研究は、21 世紀に入り、学会が立ち上がり、全集の編集が進み、急速に進展しています。これら最新の知見を交えて、ご紹介できればと思います。



ソプラノ：村井都

声楽を 飯田みち代、C・ヴァルダドルフの各氏に師事。イタリア短期留学ではスザンナ・ギオーネ氏のマスターコース修了。〈アンサンブル華〉を主宰。福祉会館等で、音楽を通じてのヒーリングを開催。2015年6月28日メニコン HITOMI ホールにて、ピアニスト吉永哲道氏とのジョイントコンサート予定。



ピアノ：白木伸征

弦楽四重奏：アンサンブルAMK（アクタス・ムジカ・カメラータ、Vn. 青井一郎、太田孝夫、Va. 井口紘子、Vc. 鷺津仁志）
1995 年企業研究所厚生施設の名称を冠した室内楽団として設立。古典派の弦楽四重奏を中心に、声楽、管楽器などとのコラボレーション、オリジナル曲の演奏を行う。

講師について

1970 年愛知県生まれ。愛知県立千種高等学校、東京工業大学を経て東京大学大学院博士課程修了、博士(学術)取得。出版社を経て、企業研究所にて研究に従事。専門は界面の物理化学の大規模分子シミュレーション。京都大学拠点研究代表者、名古屋大学非常勤講師などを兼任。

'74 年からピアノを米国クリーブランドにて Birute Smetona、京都にてカズコ・マサダ・ザイラー、名古屋にて磯村奈々の各氏に師事。'82 年からチェロを林良一氏に師事。名古屋青少年交響楽団に所属、バルトーク弦楽四重奏団の第一回公開レッスン受講、現在もセンチュリー室内管弦楽団などにエキストラ参加多数。'88 年から現代詩を鈴木志郎康氏に師事。'94 年エジプトにてストリート音楽に目覚め、アコーディオンとチェロのストリートユニットを神田神保町にて結成。表参道ストリートをはじめ、クラブ、美術館、結婚式など広範に演奏活動。他に、くものすカルテット、The margarines、桃梨、J.e.t などのバンドのライブ、CD にチェリストとして参加。最近では、親鸞聖人 750 回大遠忌に際し宗教曲を弦楽二重奏に編曲し東別院にて演奏。尾張温泉にて演歌の瀧慎太郎氏をチェロ一本で伴奏し好評を博す。作曲は '74 年よりはじめ、チェロ協奏曲('84)など。作品は川崎 K-CITY FM、東京 MX テレビなどで放送された。最近では、室内楽の小品を中心に作曲しており、「弦楽四重奏のための福島（の日本人）」('11)、「ソプラノ、オーボエ、弦楽四重奏のためのヴォカリーズ」('13)など。'13 年 6 月、第 148 回とよたクラシック同好会にて「ハイドンに学ぶ 宮仕えとイノベーションの関係」と題し、チェロとピアノの実演つき講演会を開催。本会はそのシリーズ第二回目となります。